



ガイドレベルの一作目を手に持つ佐藤社長。
試作とテストを繰り返し現在の商品が完成した。

株式会社藤興業 ふじこうぎょう

経営探訪

安心安全な森林作業を実現

技術と経験を生かして開発した作業補助器具が話題

▶▶ かかり木問題を解消する器具を開発

林業の世界で、長年の課題を解消すべく奮闘している経営者がいる。由利本荘市東由利に拠点を構える株式会社藤興業は、この道一筋50有余年の佐藤勝社長が代表を務める林産事業の会社だ。勤務先の廃業に伴い2001年に個人事業主として創業し、2009年に法人化。大径木の取扱いの経験を買われ、これまで地元のほか湯沢・雄勝や横手・平鹿地域において、素材(丸太)の生産や森林管理などを中心に営んできた。同社は今、安全性向上のための製品開発で注目を集めている。

始まりは2017年。佐藤社長はかねてから、伐採現場での死亡事故につながる『かかり木』について、解決策を模索

していた。伐倒木が予期せぬ方向に倒れ、先端が地上まで落ちてこない状態である『かかり木』。それを防ぐためには、『受け口』の精度、具体的にはチェーンソーで切り込みを入れる方向と角度が重要だ。ある時、ゴルフのパター練習に用いるレーザー機器に着想を得た佐藤社長は、伐倒方向をレーザーで可視化する補助装置の試作品製作に着手。2017年度の「あきた農商工応援ファンド」を活用し、秋田県産業技術センター、大仙市のMEP株式会社との共同開発によって、2018年10月、「伐倒補助装置 ガイドレーザー」の製品化に成功した。共同研究の契約締結や商標取得については、活性化センターの知財総合支援窓口も活用している。

▶▶ 林野庁長官のひと言をきっかけに

翌2019年、ガイドレーザーを出展した会場で、本郷林野庁長官(当時)から「受け口の精度を高めるためには、刃を当てる角度が分かる器具も必要」とのアドバイスを受けた佐藤社長。チェーンソーのハンドルに取り付け、刃の角度を調整・確認できる補助具の開発に取り掛かった。小型・軽量化も追求し、2020年、より正確な刃入れが可能な「角度指示器付き水平器 ガイドレベル」を完成させた。ガイドレーザーとガイドレベルの併用により、感覚だけに頼らない作業が可能となり、初心者が技能を高めていくことにも役立つ。

ガイドレーザーは秋田県森林組合連合会を販売元とし、全国の森林組合や林業技術の研修教育機関を中心に170台以上を販売し、ガイドレベルは現場作業員個人からの需要も高い。この2製品は、かかり木対策技術を公募している林業機械化協会において開発内容の新規性が評価され、2021年の「林業機械化協会会長賞」を受賞。また、ガイドレーザーは秋田県発明展で、「発明協会会長奨励賞」も受賞した。

現在、幹が傾いている広葉樹などにもガイドレーザーを活用できるよう改良を進めており、その計画が新たに今年度の「あきた農商工応援ファンド」に採択されている。



①コンパクトで持ち運びがしやすく、新人からベテランまで簡単に使用できる。
②角度板で15度ピッチ毎に設定が可能。
③社長室には、賞状や特許証が並ぶ。

▶▶ 安心して従事できる林業を目指して

藤興業の従業員は現在14名。下は30歳代から上は70歳代、平均年齢60歳代とベテラン勢が多い。現在、同社の間伐作業の現場では、必ずガイドレーザーとガイドレベルを使用しており、かかり木がまったくなくなった。以前は、現場から連絡が来ると真っ先に事故が頭をよぎっていたという佐藤社長。「作業の安全性を高めることで、作業員本人のみならず、その家族や、経営者にも少しでも安心してもらいたい」と話す。

現在75歳の佐藤社長は70代から開発を始め、特許と実用新案を2件ずつ取得。さらに3件の特許を申請中だ。昨年入社した次男の佐藤良専務への事業継承を見据えながら、その開発熱はますます高まっている。「苦労して一つの開発を成功させると、また次々にアイデアが浮かぶんですよ。安全性向上のための開発とともに、若い世代や女性が林業現場に入りやすくなる工夫にも取り組んでいきたいです」。



④レーザーを反射板に照射し、伐倒目標位置を定める。
⑤レーザーをガイドに正確な伐倒方向を確認しながら「受け口」を作ることが可能に。
※レーザーを見やすくするため、写真を一部加工しています。

林業の安全性を高めるために、今後も積極的に技術開発に取り組みます。

代表取締役 **佐藤 勝**
さとう まさる



株式会社藤興業

〒015-0221 秋田県由利本荘市東由利館合字五海保2
TEL.0184-69-3855 FAX.0184-69-3858 <https://www.fjk-akita.jp>

創業/2009年 資本金/500万円 従業員数/14名
業務内容/林産事業・産業技術製品開発販売